

書物の死（？）：『交換教授』論文酷評事件 におけるメディア使用のパワーゲーム

山 田 仁

David Lodge は、『小説の技巧』（*The Art of Fiction*, 1992、以下 AF）において、『交換教授』（*Changing Places*, 1975）で章ごとに物語形式を変更させたのは、内容とは別の次元で読者に意外性を喚起する必要性に迫られたためであったと告白している。¹⁾ 作中で物語の形式を変更することは、時としてコミュニケーション形態や使用メディアの変更を伴う。また『交換教授』は、物語の中で物語形式やメディアに関して直接的に言及する記述も少なくない。この意味で、『交換教授』は自ら採用するコミュニケーション形態とメディア性を意識し、また読者にもその意識を喚起させる小説であるといえよう。第三章“Corresponding”と第五章“Changing”は、米国人英文学教授の書いた論文が痛烈に批判されるというエピソードを差し挟む。（以後この出来事を「論文酷評事件」という名称で括る。）内容自体は些細でありながら、書物、週刊誌、手紙という文字メディアと、対面式会話と電話という口頭メディアを動員することによって、この挿話はメディア特性への意識を覚醒する。

『交換教授』は、二項対立的構図を主題系とする「カウンターパート」小説である。²⁾

-
- 1) Developing this highly symmetrical and perhaps predictable plot, I felt the need to provide some variety and surprise for the reader on another level of the text, and accordingly wrote each chapter in a different style or format. (AF, 227)
 - 2) The whole work is pervaded with doubleness and binary oppositions, features to which Lodge has always been inclined and which were given a new intellectual significance in the 1970s with the growing academic interest in structuralism... (Bergonzi 15)

英国人大学講師 Philip Swallow と米国人大学教授 Morris Zapp が、互いの相手国に交換留学する。その妻 Hilary Swallow と Désirée Zapp は母国に残る。各々の教員は職場や言語それに価値観を交換し、ついには妻をも交換する。第三章は全編を通して伝統的な書簡体を採用する。大西洋で隔てられた二組の夫婦は、文通を通して近況を報告する。本稿が目する「論文酷評事件」も、一つの近況報告として読者に提示される。英国のラムッジ大学 (The University of Rummidge) に留学しているモリスが、米国のユーフォリア (Euphoria) 州プロティノス (Plotinus) に残してきた妻デジレに書き送った手紙がそれである。この手紙は、文字メディアの特性に直接的に言及する。

大西洋横断コミュニケーション

モリスは、留学先のラムッジ大学図書館で『タイムズ文芸付録』 (*The Times Literary Supplement*, 以下 *TLS*) を調べていたところ、ジャクソン・マイルストーンのための記念論文集 (*Festschrift for Jackson Milestone*) に対する書評を「まったくの偶然に」 (*quite by chance*) 発見する。この「偶然性」はメディア・コミュニケーション論的に非常に重要な概念であり、後で考察する。評者は匿名である。その論文集に ‘*Apollonian-Dionysian Dialectic in the novels of Jane Austen*’ という堂々たるタイトルで論文を寄稿していたモリスは、自らの論文に対する批評を興味津々で読み始めた。すると痛烈に批判されているではないか。当然のことながら、誇り高きモリスは激怒する。彼の激怒は批判されたことに関わると同時に、その批判に長期間気付かなかったことに対する無念をも含む。この手紙を書いている時点で、モリスは批判者を特定できていない (モリスを批判した人物の氏名が語り手によって明かされるまで、便宜上「批判者」と呼ぶことにする)。モリスが論文を書物に掲載する。読者の一人がそれを読み、書評を週刊誌に投稿する。そしてモリスが批判文を読み、批判された事実を手紙で妻デジレに伝える。デジレがその書簡を読む。ここには三人の参加者による大西洋横断コミュニケーションが成立する。

上記のコミュニケーションで使用されるメディアに議論を進めよう。Marie-Laure Ryan は、「メディア」に関して二種類の定義を提案する。³⁾ 一つは伝達手段による定義 (transmissive definition) であり、これはテレビ、ラジオ、インターネット、蓄音機、電話などのテクノロジー全般と、本、新聞、そして手紙などの文化的回路 (cultural channel) を包括する。今一つは記号論的定義 (semiotic definition) であり、これは language, sound, image, paper, bronze, human body などを含む。ライアの言う記号論的定義によるところのメディアとして、モリス、批判者、そしてデジレは一貫して言語 (language) を採用する。さらに三人が使用するメディアとしての言語は、インクや紙という技術的サポートを受けることによって、文字として物質性を顕現する。⁴⁾ 文字はその下部範疇として、「手書き文字」、「活字」、そして「電子文字」に分類される。⁵⁾ 『交換教授』は「電子文字」を想定していないので、本論は「手書き文字」と「活字」に議論を限定する。モリスは論文を手書きではなく活字で著す。批判者は書評を活字で公表する。批判された事実を伝える手紙をモリスはタイプライターで打つ。もはや活字は紙やインクと不可分に一体化することによって、それぞれ書物 (論文集) と週刊誌 (TLS) —ライアの言う transmissive definition における意味でのメディア— が形成される。同様に、タイプ文字も、レターペーパーやインクと分かちがたく一体化することにより、手紙が成立する。⁶⁾ 紙、インク、そして文字は不可分に一体化して、書物、週刊誌、そして手紙という文化的装置を形成する。インクが紙の上に痕跡を残さねば、テキストは成立しない。紙はインクがなければ、白紙にすぎないのである (白紙のテキストから成り立つダダイストによる詩集という例外を別にして)。このよ

3) 以下の議論は Ryan 21 に多くを依拠している。

4) 文字は象徴として視覚的に捕捉されるという意味においては、映像 (image) の要素を含むと考えることもできよう。しかし、『交換教授』はコンクリート・ポエトリの類の空間的拡がりによって意味形成を依存せず、「見たり鑑賞する」ことを目的としていない。従って、『交換教授』に関しては映像的側面を極小化してよいであろう。

5) 文字の歴史的変遷に関しては Ong や清水などを、分類法については Ong を参照した。

6) 文字と紙の不可分の一体化に関しては、清水「バベルのあと」を参照した。理由は定かではないが、清水は技術的支えとしてのインクについて言及していない。

うにして、書物、週刊誌、そして手紙という複数の異なるメディアが、三者のコミュニケーションに参加する。

非対面式集団コミュニケーション

第三章“Corresponding”におけるモリス、批判者、そしてデジレによる文字のコミュニケーションを前部と後部に分ける。前部は、モリスによる論文発表、匿名の研究者による論文の受容と批判、そしてモリスによる批判の受容である。後部は、モリスからデジレへの往信とデジレによる返信である。まず前部から。

モリスは自ら発表した論文を批判されるというコミュニケーション状況を、いくつかの比喩を用いて妻宛の手紙で説明する。モリスの激怒が彼の論理的思考を混乱させているので、先ず彼の論旨を分節化し整理する必要がある。

Imagine receiving a poison-pen letter, or an obscene telephone call, or discovering that a hired assassin has been following you about the streets all day with a gun aimed at the middle of your back.⁷⁾

何者かが批判しモリスがそれに気付いた状況を、彼は先ず中傷の手紙を受け取ること、そして卑猥ないたずら電話がかかってくることに喩える。この比喩は、匿名性への苛立ち、即ち論文の批判者を特定できないことに対する無念の発露と理解することができる。メディアとしての手紙と電話はその特性を異にするが、非対面・遠隔式のコミュニケーションを可能にするという共通点も確認できる。人類の誕生以来、口頭による対話（oral conversation）が参加者の身体的近接を要請する対面式の（face-to-face）顔の見えるコミュニケーションであり続けたのに対して、メディアとしての手紙や電話は空間的隔絶を可能にする非対面・遠隔式の顔の見えないコミュニケーションを実現した。電話と手紙の比喩で表明されたモリスの苛立ちは、論文を公開しそれに対して批判するというコミュニケーションが有する非対面

7) p. 126.『交換教授』からの引用は Lodge 1975, 1978 を使用した。以下、ページ番号のみを記す。

性、乃至は遠隔性にその標的を見出すことができる。

メディアとしての文字と関係づけるならば、コミュニケーションの非対面性と遠隔性は、手書き文字やタイプ文字、活字、そして電子文字を含む文字全般で起こりうる現象である。声との比較で文字の特性を確認しよう。⁸⁾ 声としての言語は身体と密接に繋がっていて、コミュニケーション参加者から発せられた瞬間に消え去り痕跡を残さない。身体性を伴う発話言語はコミュニケーション参加者を共同の時空に引き留め、参加者を「その場」と「その時間」という具体的状況に繋留する。仮にモリスのオースチン論とそれに対する批判が対面状態に置かれ、文字ではなく声で行われていたなら、批判者の不特定性は解消し、モリスは批判者を容易に同定することができたであろう。それに対して、記述言語は読み手に応答することはなく、自らを弁護することもない。このことは、書き手、読み手、そして書かれたテキストが「その時」と「その場」に拘束されることなく、双方から独立した自閉的な時空を形成することを意味する。文字の脱身体的特性が非対面式コミュニケーションを招来し、コミュニケーション参加者の不特定性を可能にするのである。モリスは自分の置かれた状況を手紙の他に電話の受信で説明するが、彼の重点は電話のヴァーチャルな身体性ではなく、その遠隔性と非対面性に置かれていると理解すべきである。⁹⁾

モリスの比喩は、「殺し屋が自分の背中にピストルを向けた状態で町中を一日中つけ回されていたのを発見した」状況へと移る。「背中にピストルを向けられた」状況は、非対面状況を喚起する。仮に暗殺者がモリスと対面した位置取りから拳銃を胸に向けていたならば、モリスは危険を察知できたであろう。背後から照準を合わされる状況は、上述した匿名性を喚起する。「背後から付け狙われていた」という比喩で喚起される鬱憤の原因は、批判者が声ではなく文字を採用したこと、そして文字を選択したことによって、結果的に非対面・遠隔式のコミュニケーションを

8) メディアとしての声と文字の比較は、Ong, Chafe, Tannen, そして Jackson を参考にした。

9) 電話などの声による遠隔通信は、コミュニケーション参加者の同期性を要請しつつ、空間的隔絶を容認する。この空間的隔絶と非対面状況の容認が、電話使用者の匿名性を担保する。詳しくは吉見を参照のこと。

招来したことに見いだすことができる。

モリスの手紙に戻ろう。「町中をつけ回されていたのを発見した」状況はどうか。モリスは論文集という媒体で情報を発信し、それに対して受け手の一人が *TLS* を媒体として返信し、その返信にモリスは気付いたのである。暗殺者が群衆に身を潜めて標的を狙撃するように、批判者も大勢の受け手に紛れてモリスを批判する。古田暁はコミュニケーションをそのレベルで分類するが、古田の分類法に従えば、モリスと批判者によるコミュニケーションは、一人の送り手と多数の受け手との間で成立する集団レベルにあるといえよう。(古田 32-33) ここには、個と大衆との間で交わされるマス・コミュニケーションが成立している。

コミュニケーション・レベルの議論にメディアとしての文字を絡めよう。文字が手書き文字と活字、そして電子文字に下部範疇化されることは前に述べた。デジレがモリスへの手紙の中で、“I’m not going to change my mind about the divorce, so please don’t waste typewriter ribbon trying to make me.” (120) と書いていることから判断できるが、彼らの文通にはタイプライターが使用されている。¹⁰⁾ 従って、厳密に見れば手書き文字ではない。Walter Ongによると、手書き文字と活字の最大の違いは、活字はインクのシミである文字として現出する以前から金属の字型として存在している。しかし、手書き文字は書かれテキストになるまでは存在していない。活字は言語の物質性を促進させたというのがオングの見解である。(Ong 244) これに基づくならば、タイプ文字は活字の一形態と見なさなければならない。しかし、本論の依って立つ観点の一つが、コミュニケーション・

10) モリスは、ラミッジ大学で依然として手書き文化が支配的であることを揶揄する。“The end of the Gutenberg era was evidently not an issue here: they were still living in a manuscript culture. Morris felt he understood more deeply, now, what McLuhan was getting at As a system for conveying information it was the funniest thing he’d seen in years.” (59-60) また彼の双子に手紙を催促する一文 “ask them to write a line to their old Dad, if the Euphoric public school system is still teaching such outdated skills as writing.” (127) も、手書き文字文化への嘲笑と読める。さらに、モリスがラミッジ大学の学科主任の職を勧められた際学科の改革案を列挙するが、その中に学生の提出するレポートをタイプライターで打つことを義務化する案が含まれている。“making the use of typewriters by students obligatory” (234)

レベルであることを再度確認しよう。手書き文字と同様に、タイプライターで打ち出された文字は、それ自体はマス・コミュニケーションの空間に拡散されることを期待していない。手書き文字とタイプ文字は、それをマス・コミュニケーションのレベルに適合させるためには、複写機というさらなる技術的サポートを必要とする。さらに、タイプライターのキーをたたく圧力によって発生する印字の濃淡、行送りのタイミングの多様性、インクの汚れやかすれなど、タイプ文字は手書き文字に残存している身体性を留めており、人間の営みを予感させる。¹¹⁾ この意味で、タイプライターによる文字も手書き文字もいずれも現物限りである。メディアとしての手紙はタイプライターを使用しようと直筆で書かれようと、それが要請するコミュニケーション・レベルは一对一、乃至はせいぜい極めて限られた小規模集団における回し読みといった一对少人数のレベルに落ち着く。後述するが、大量生産、大量消費、大量複製を目的とする活字の主要特性を、その遍在性、拡散性、増殖性に認めるならば、タイプ文字は明らかに手書き文字の文化に留まると理解しなければならぬ。従って、本稿はタイプライターによって書かれた文字と手書き文字を同一視するスタンスを貫きたい。

手書き文字と比較すると、活字は元来大量生産と複製を目的とした媒体であり多数の受け手を想定する。印刷術ではなく冊子体の発明こそ文化大革命であったと主張する Roger Chartier でさえも、活字印刷の発明を人類史上の革命的な事件と評価する Elizabeth Eisenstein の主張を甘受せざるをえない。(Eisenstein、シャルチエ 38-46) 即ち、印刷術の発明によって、理論的に同一の書物を無限に複製し再生産することが可能になったことは、揺るぎない事実なのである。つまり、活字印刷の発明が招来した書物の大量生産と大量複製は、書物の遍在性、拡散性、増殖性

11) ロッジは *AF* の「書簡体小説」の項において、書簡体のメリットに言及する。“Writing, strictly speaking, can only faithfully imitate other writing. Its representation of speech, and still more of non-verbal events, is highly artificial. But a fictional letter is indistinguishable from a real letter. (*AF*, 24) しかし、虚構の書簡に付随していると想定される上記の物質性を、書物=小説は再現することはできない。もっとも、タイプ文字は手書き文字よりも規格化されていることも紛れもない事実であるが。

を決定づけた。¹²⁾ 活字印刷の洗礼を受けた人類は、一対不特定多数のレベルにおけるコミュニケーション、それも非対面式のコミュニケーションの洗礼を受けることになる。このように、一対多数の集団コミュニケーション・レベルは、文字全般が等しく共有する特性ではなく、活字のみが帯びる特性なのである。使用メディアが書物と週刊誌といういずれもマスメディアであることから判断して、モリスの鬱憤は、「町中をつけ回されていたのを発見した」件に関しては、活字メディアが招来する集団レベルのコミュニケーションに帰因する。

モリスは、さらに批判されたことに対する憤懣をデジレにぶつける。

I mean, the shock of finding some source of anonymous malice in the world directed specifically at you, without being able to identify it or account for it. (126)

第三番目の比喩には、上述した非対面式コミュニケーションと一対多数のコミュニケーションの両方が集約されている。なぜなら、「悪意を抱いた人物が自分を狙っていることに気付く」状況は、活字がもたらす一対多数の集団レベルのコミュニケーション状況を示唆しており、「悪意の匿名性」や「それが誰か、なぜ狙うかも突き止められない」のは、文字全般の特性である非対面式のコミュニケーションにその主因を求めることができるからである。

そして、彼の憤懣は手紙の核心部分においてついに炸裂する。

All these years I've been walking around with a wound I never knew had been inflicted. All my friends must have known - they must have seen the knife sticking out between my shoulder-blades - but not one sonofabitch had the decency to tell me. (127)

12) 活字印刷と書物の大量生産を支えた技術革新として、紙の大量生産が挙げられる。詳細は、Henri-Jean Martin 『書物の出現』を参照のこと。

この比喩にも、文字と活字の諸特性、即ち非対面式コミュニケーションと一対多数のコミュニケーションの両方が凝縮している。繰り返し述べたように、ナイフが突き立てられていることに気付かなかったという無自覚は、一対多数の集団コミュニケーションが生起する体験である。「(友人は皆) 僕の二つの肩胛骨のあいだから突き出ているナイフを見ていたに違いない」は、*TLS* 紙上で批判するという多数に向けられたメッセージを、モリス自身が受信していなかったことに対する無念の発露である。また、ナイフの刺さった箇所が肩胛骨の間というモリスにとって死角にあったということは、前述した背後から銃の照準を合わされる状況と同様に、非対面式のコミュニケーションを連想させる。

モリスは自身の憤懣と無念の主因を次のように総括する。

But, but – this is the turn of the screw – there’s nothing I can do about it. I mean I can’t write to the *TLS* saying, in the usual style, ‘My attention has been drawn to a review published in your journal four years ago...’ I should just look ridiculous. That’s what bugs me about the whole business – the time-slip. It’s only just happened to me, but to everybody else it’s history. (127)

論文集が出版されたのが1964年、そしてモリスが批判に気付き、憤懣と無念を妻に吐露したのが1969年(7)であるから、論文集と週刊誌を媒体とした足かけ五年越しのコミュニケーションである。time-slip「気付かぬうちにいつのまにか時間が経過していたこと」にモリスは自身の憤懣と無念の照準を転換している。基本的に「時間の経過」は、非対面式の遠隔コミュニケーションに伴う現象である。参加者による空間の共有を必要としないこの種のコミュニケーションは、しばしば高度の保存性能を発揮するメディア使用を要請する。この事例では論文集と週刊誌が使用された。文字メディアの保存能力が時間の経過を許容するのである。これに対して、身体の内接する対面式コミュニケーションは時空の共有を条件とする。もしモ

リスのオースチン論が研究会において口頭発表され、質疑応答の際にその場で聴衆から批判を受けていたなら、モリスは時間の経過に困惑することはなかったであろう。

偶然の気付き

だが、モリスの言う ‘time-slip’ を文字全般が招来する非対面・遠隔コミュニケーションのみに帰因させて片付けることはできない。動詞の ‘slip’ は *SOD* の定義によると、“move quickly and softly, without attracting notice; pass gradually, inadvertently, or imperceptibly; (of time) go by rapidly or unnoticed” とある。また *Webster* では、“to go quietly or secretly; to move without attracting notice; to go imperceptibly; to pass unmarked; as, time slipped by” と定義されている。いずれの定義においても、経過に対する無知覚が強調されている。今回モリスは批判されていることに気付いた。つまり、彼の「時間の経過論」は、批判を受けたことに対する自覚を前提としており、気付き＝自覚を伴う。そもそも永遠に無自覚であり続けていたならば、時間の経過を痛感する契機さえなかったであろう。なぜなら、「時間の経過」とは、批判メッセージが発信された時点を始点とし批判に気付いた時点を終点とする時間に介在するが、無自覚とは終点が不在であることを条件とするからである。要するに、モリスの苦悩の原因は、「時間の経過」そのものというよりも、むしろ五年間気付かなかったことに今頃気付いたことにあると理解する方が適切である。

では、モリスはどのようにして批判に気付いたか。モリスの自覚は、偶然に支配されている。前述したように、彼は *TLS* で論文が批評されていることを偶然 (quite by chance) 発見したと妻宛の手紙で書いている (126)。この偶然性には留意する必要がある。モリスは「時間の経過」に対する苛立ちを、以下に示す別の手紙でも表明している。

Why don't you write to me any more, Désirée? I am lonely here these

long English night. (134)

モリスはデジレから返信が来ないこと、正確に言えば、自分の手紙が送付された時点から、妻の返信を受け取ると予想される時点との間に介在する異常に長い時間の経過に業を煮やし、手紙の終わりに返事を催促する一文を書き添える。「時間の経過」は、論文発表とそれに対する紙上批判ばかりではなく、上記の文通にも現出する。なぜなら、いずれも文字という記録保存性能の高いメディアを使用した遠隔・非対面式コミュニケーションだからである。しかし、コミュニケーション・レベルの観点から比較すると、これら二つのコミュニケーションは決定的な差異で隔てられている。文通は、一人の送り手と一人の受け手を想定する。そのコミュニケーションは、一対一のレベルにあり閉じられている。従って、無反応乃至は無視を含めて、受け手からの反応に対して、送り手の側に早晚気付きが必然的に生じる。現にモリスが返信を催促した手紙の直後にデジレの返信が挿入されており、一対一コミュニケーションの閉鎖した完結性が演出されている。一対一、乃至は一対少数のレベルのコミュニケーションでは、気付きは必然に依拠しており、返信に対する送り手側の油断や不覚が発生することは想定できないのである。妻に返事を催促することができるのは、モリスが受け手を妻一人に限定し、反応への期待を唯一の発信源に一点集中することができるからである。

それに対して、論文集や週刊誌という一対多数のマス・コミュニケーションのレベルでは、モリスと批判者のコミュニケーションのように気づきが起こる場合もある一方で、気付かないまま放置されることもありうる。一般的傾向として、一人の送り手が対峙する受け手が数的に多くなり、非対称性が高まれば高まるほど、気づきの可能性は減少する。そしてたとえ気付いたとしても、その気付きは必然から偶然への依存度を深めるのである。一対多数のコミュニケーション空間は一対一や一対少数のそれと比較すると格段に開かれており、送り手にとって反応の発信源を同定することが極めて困難である。どこから反応が返ってくるか、そもそも反応が生じたのかどうかさえ確認できない状況が、送り手の精神に隙を生む。モリスの「気

付きの衝撃」the shock of finding (126) は、偶然によってこの間隙を突かれた結果である。モリスも認めるように、彼の気付きは「全くの偶然」の所産である。従って、モリスが怒りを向ける対象は「時間の経過」ばかりではなく、気付きの偶然性、換言すれば、偶然の機会を捕らえていなければ永遠に気付かなかったであろうという現実なのである。気付きの偶然や必然は、コミュニケーション・レベルに関わる問題である。モリスの偶然の気付きは、一対多数のレベルにおけるコミュニケーションに固有の現象であり、批判者が週刊誌を選択したことによってもたらされたメディア体験なのである。

コミュニケーション・レベルの落差

ここまでモリスの鬱憤に焦点を当てながら、モリスによる論文公表と匿名の研究者による紙上批判、そしてその批判への気付きに限定して、彼らのコミュニケーションを分析した。モリスによる一連の比喩と「時間の経過」論には、コミュニケーションに関わる二つの議論が錯綜していると理解することができる。即ち、非対面性、乃至は遠隔性、そして一対集団という著しく対称性を逸したコミュニケーション・レベルである。この二つの観点を堅持しつつ、ここからは、モリス批判とモリスの気付きに後続するコミュニケーション過程にまで射程を拡大しよう。考察の対象は、文字によるコミュニケーションの後部、即ち、批判されたという事実をモリスが妻デジレに手紙で伝え、手紙で伝達された情報に対するデジレのコミュニケーション行動に及ぶ。コミュニケーション参加者としては、モリスと批判者の他に、ここからはデジレにも加わってもらおう。

論文発表とそれに対する紙上批判は、一対多数の集団コミュニケーションのレベルにあることは前説したとおりである。それに対して、批判されたという事実をモリスがデジレに手紙で伝えるというコミュニケーションは、一対一のレベルにある。一対一のレベルにあるコミュニケーションは、その使用メディアの如何に関わらず、閉ざされたコミュニケーション空間を創出する。対面式の口頭コミュニケーション、さらに電話や文通やメールというメディアを使用するコミュニケー

ションは、二人のコミュニケーション参加者だけが占有する私的な空間を招来するとともに、部外者を厳しく排除する。モリスと批判者が置かれていた集団コミュニケーションは、公的な開かれた空間で展開した。従って、モリスによる批判の気付きは偶然の所産ではあったものの実現した。その意味で、開かれたコミュニケーション空間は、気付きの可能性を残存させていたことになる。それに対して、文通という閉鎖的でプライベートなコミュニケーション空間は、コミュニケーション参加者の気付きを必然化するとともに、部外者による気付きの可能性を極限にまで排除する。陰口に代表される閉鎖的で排他的なコミュニケーション空間は、情報が空間の外に漏洩しないことを保証する。モリスが妻デジレ宛に書いた手紙の内容、即ち、彼が批判されたことに対して激怒し反論できないことに無念を感じていることを、文通から排除されている批判者は全く知らない。批判者の無知は、モリスが書簡というプライベートなメディアを選択することによって、閉ざされたコミュニケーション空間を夫婦で占有し、夫婦以外の他者をコミュニケーション空間から閉め出した結果である。仮にモリスが *TLS* というマスメディアで批判者に再反論していれば、批判者に気付きの可能性が発生していたことであろう。週刊誌というマスメディアを媒介として行われた批判が、文通という一対一の閉鎖的なコミュニケーションを通して応酬されるというコミュニケーション・レベルの落差が、二人の研究者の情報量における優位性を決定づける。モリスによる論文公表とそれに対する批判という一連の出来事をめぐっては、モリスとデジレが文通という手段を利用することによって彼らは情報の量的優位を獲得し、批判者を圧倒的不利な立場に置く。モリスは、批判に反論する機会を逸することにより苦汁を嘗めた。批判者に対する情報の量的優位は、モリスのアンフェアな報復なのかもしれない。

デジレによる統制

モリスの批判者は、*TLS* というマスメディアを採用する開放的なコミュニケーション空間にのみ自らを置く。モリスは論文集を媒体とする開かれた空間に身を置く点では批判者と同等でありながら、同時にデジレとの文通という閉じた空間にも

参与する。二人の研究者はいずれも開かれたコミュニケーション空間に漕ぎ出し、不特定多数の外洋を冒険している。デジレはどうか。彼女は一貫して夫モリスとの文通という一対一の閉鎖的なメディア空間にのみ安住し、決して不特定多数の開かれた外洋に漕ぎ出すことをしない。デジレは、モリスや批判者が被った災難を体験することはない。不特定多数からの不測の反応に対する無知と怯えから免れているという意味で、彼女は安全な入り江に守られている。

そればかりではない。デジレは夫モリスとの文通において、批判されたことに対する夫の憤怒と反論できない無念に対して全く言及せず、完全に無反応を決め込む。文通を展開順に追ってみよう。先に採り上げたモリスの手紙が読者に提示されたあと、モリスとデジレの文通は中断され、フィリップとヒラリーの文通が二通挿入される。そのあとにモリスの件の手紙に対するデジレの返信が提示されるのかと期待させるが、実際には再度モリスからデジレへの手紙が後続する。その手紙の中で、モリスは自分を批判した張本人がフィリップであることを証明する状況証拠を掴んだと伝える。読書体験の時間軸に則るならば、この時点で読者もモリスの推定を真に受けて、批判者はフィリップであると刷り込まれる、第五章で真犯人が判明することは夢想もせず。モリスは自分の論文が批判されたことに執着し、その話題を妻への再度の手紙で蒸し返すのである、妻からの反応を（できれば同情を）期待しつつ。この手紙の終わりに書き足されたデジレに返事を催促する一文が痛々しい（先に引用した）。モリスの催促が叶ったのか、ついに妻からの返信がある。しかしその手紙には、モリスの屈辱に対する妻の反応や感想は全く書かれていない。それどころか、ディナーパーティで行われた「屈辱」というゲームについてデジレは詳細に語り出す始末である。これには、モリスの経験した屈辱に対するデジレの無関心が反映されていよう。無反応という反応を返すことにより、彼女は件の話題のさらなる展開を一方向的に打ち切る。モリスにとって重大な体験が、デジレによっても簡単に軽んじられるのである。力学的に見て、彼女は無反応によって、コミュニケーションのキャッチボールにおける主導権をモリスに対して掌握するのである。モリスとの文通において、コミュニケーションをコントロールしているのは常

にデジレである。書簡をメディアとする閉じられたコミュニケーションであるからこそ、デジレによる無言の反応は必ずやモリスに届くことであろう。反応の欠如＝無それ自体がメッセージ価値を帯びる。話題の展開を強制終了することが、話題の展開であり充実なのである。書簡というメディアが、無言の反応のメッセージ価値を増幅する。仮に開かれたコミュニケーション空間を創出するメディアが採用されていたならば、デジレの無言はその力学的凄みを大幅に減じられていたことであろう。その理由は、先に論じた集団コミュニケーション・レベルに関わる気付きの偶然性と同じである。つまり、一対一のレベルのコミュニケーションでは、気付きは必然に依拠しており、送り手は唯一の受け手に反応の期待を集中させることができるのに対して、一対多数のレベルにあるコミュニケーションでは、反応の発信源に対する送り手の注意は散漫にならざるをえないからである。

さらに、デジレは、モリスがフィリップを手紙の中で痛罵していたことを、不倫相手のフィリップに暴露しない。フィリップの脳裏には、モリスに痛罵されていた事実は掠めもしない。明かさないことによって、彼女は情報の量的統制を行う。¹³⁾

論文発表に端を発する一連のコミュニケーションは、デジレによる独断的で一方的な情報コントロールによって一時的に休眠する。しかし、David Berlo の言うコミュニケーションの継起性（プロセス性）に則るならば、これら三者によるコミュニケーションは決して終わらない。¹⁴⁾ この一連のコミュニケーションは、情報伝達の制御と情報の量的操作というプロセスを経て、デジレ、モリス、そしてフィリップの社会的な関係構築に多大な影響力を行使し続けるのである。デジレは、モリスやフィリップとの関係において圧倒的に優位な地位を確保する、モリスに対しては

13) デジレがモリスとの閉ざされた文通に書き添えた次の一文は、情報量をめぐるフィリップの劣勢に対するデジレの優越感を示唆していないだろうか。Mr Swallow himself is blissfully ignorant of his responsibility for the whole drama. (137)

14) If we accept the concept of process, we view events and relationships as dynamic, ongoing, ever-changing, continuous. When we label something as a process, we also mean that it does not have a beginning, an end, a fixed sequence of events. It is not static, at rest. It is moving. The ingredients within a process interact; each affects all of the others. (Berlo 23-24)

話題の展開を一方向的に打ち切る伝達プロセスの統御者として、そして、フィリップに対しては事実を隠蔽する情報の量的統制者として。デジレのもとで、モリスとフィリップは情報統制される。論文酷評事件は、第五章の終局で真犯人を見るまで一旦冬眠する。

声の参戦

第三章でモリスは、彼の論文を批判した人物はフィリップであると断定するに足る状況証拠が揃っているとデジレに書き送っている。(134) 彼の断定には説得力があり、読者もそれに洗脳され続ける、真犯人が明かされるまでは。読書体験における長い時間の経過を挟んで、モリスの論文を批判した真犯人が第五章で明かされる。論文酷評事件の真相が提示されるまでには、ペーパーバック版の紙幅にして99ページという長い休眠期間が明けなければならない。真犯人がラミッジ大学英文学科主任 Gordon Masters であることが読者に知らされるのは、モリスがヒラリーとの情事に耽っている深夜に、ラミッジ大学副学長 Stewart Stroud からモリスへの電話を通してである。電話というメディアを通して、真相がモリスに伝えられる。この新事実の信憑性を確認するために、モリスは入浴中のヒラリーからそれとなく裏付けを取る。‘Did Philip ever borrow books from Gordon Masters?’ (233) 風呂場でのコミュニケーション形態は、一対一の口頭コミュニケーションである。同日の昼間に、研究棟でモリスはゴードンにカーチェイスさながらに追い回される。モリスが原因で退職に追いやられたことを恨みに思っ、この狩猟の名手がモリスを射殺するために再来したと勘違いしたモリスは、研究棟を縦横無尽に逃げ回る。しかし電話でのストラウド副学長の説明によると、ゴードンがモリスを追跡したのはモリスと面会しなかったからだというが、その面談こそ、かつてマスターズがモリスの論文を酷評した内容に関する内容を含むはずだったのである。モリスがゴードンの追跡を振り切ったために二人の会談は実現しなかったが、もし実現していれば、二人は一対一の口頭による対話を行っていたことであろう。つまり、新事実の告知と真犯人の判明に採用されるメディアは、電話と対面状況の違いこそあ

れ、いずれも声に依存しているという共通点が確認できる。

声の特性については文字との比較で言及済みであり、多くを繰り返さない。声は文字のように保存性能を持たない一過性の媒体であり、それ故に身体への依存度が極めて高い。第三章で、モリスは論文酷評事件とその犯人をデジレに伝えたのは手紙という文字媒体であった。従ってこの記録は持続的に残る。しかし、事件の真相と真犯人については声で伝達されるために、伝えられた瞬間に言説は消滅する。文字や活字という媒体によって記録が外在化されることなく、真相はモリスの体内の残響として内在化される。声の一過性と身体性が真相の隠蔽に加担する。ストラウド副学長は、事件の真相がモリスにとって何を意味するのか知るよしもない。ヒラリーは、フィリップがゴードンから頻繁に書物を借りていたことがモリスにとって何を意味するのか理解する時間的余裕さえ与えられない。声が消滅するとともに、事件は瞬時にストラウド副学長とヒラリーの念頭から消える。モリスはメディアとしての声から恩恵を受けることによって、真相が意味することを独占する。

通話と浴室での戯れ

論文酷評事件の新事実を伝える第一報では、通話状況が採用される。メディアとしての電話は、コミュニケーション参加者が発信する視覚的情報を一切伝達しないという特性を手紙と共有する。¹⁵⁾ 新事実を知ったモリスはたいそう驚いたに違いない。嫌疑をかけていたフィリップへの良心の呵責、そしてデジレに虚偽情報を流したことに対する罪悪感、そしてマスターズに対する憎悪、彼はこれらの入り交じった感情を視覚情報として露呈したことであろう。しかし、真相を知ったモリスはその視覚情報をストラウド副学長から隠蔽することができる。モリスは、視覚的回路を遮断する電話のメディア特性に乗ずる。

さらに、モリスがヒラリーと浴槽で戯れる際の彼の位置取りに注目しよう。彼はヒラリーを背後から愛撫し、その姿勢を保ちながら彼女から事件の真相の裏付けを聴取する。(233) このように対話者の背後をとる位置取りは、視覚的チャンネル

15) テレビ電話はこの限りではない。

を遮断した電話と類似した回路構成を招来する。モリスは、真相の信憑性を確信した際の感情の発露をヒラリーに目撃されることはない。ヒラリーを事件の情報から遮断するという目的達成のために、モリスの位置取りは有効に機能したといえよう。電話そして背後の位置取りによって、情報価値、即ちマスターズが論文酷評事件の真犯人であるという情報の重大性はモリスの心中深く内在化され、ストラウド副学長はいうまでもなくヒラリーの脳裏に掠めもしない。

コミュニケーション・レベルの観点からすると、論文酷評事件の真相の伝達と確認は二事例とも一対一のコミュニケーションで行われ、複数の聞き手を前にした非対称的なコミュニケーション・レベルは採用されない。手紙による文通と同様に、口頭の場合においても一対一のコミュニケーション空間は閉鎖性を発揮する。一対一の口頭コミュニケーションは部外者にとって極めて排他的であり、一方で参加者には親近性をもたらす。閉鎖した空間は、真相秘匿のための絶好の拠り所である。もし真相が一対複数のコミュニケーション・レベルで提示されていたならば、真相の秘匿は困難を極めたことであろう。

Edward Hall は、声による対人コミュニケーションにおいて個々の参加者が自身を中心に置きつつ保持している空間を四層の帯域に分類し、それぞれ密接距離 (intimate distance)、個体距離 (personal distance)、社会距離 (social distance)、公衆距離 (public distance) と呼ぶ。(Hall 113-29) 吉見俊哉が指摘するように、電話がもたらすコミュニケーション空間はこれら全ての距離帯を横断し無効化する。(吉見 116) なぜなら、物理的に隔絶され顔の見えない公衆距離が介在するコミュニケーション参加者に、電話は精神的親近性を喚起するからである。吉見によると、メディアとしての電話は一対一の口頭コミュニケーションよりもさらに親密で閉鎖的なコミュニケーション空間を招来する。

とりわけ、ラジオやステレオのように身体から離れた場所におかれたスピーカーによって相手の声を伝えるのではなく、耳元に押しつける受話器と口元に押しつける送話器によって声を送り伝える現在の電話は、通話する二人を

あたかも互いの耳元でささやき合うかのような関係に置いている。電話で話すとき、人は周囲の他者からの介入が一切排除された状態で、二人だけのささやき合いの世界に入り込むのだ。・・・電話で話す二人は、遠く離れた場所にながら、電話する二人の周囲にいる誰よりも近く、密着した関係の中にいる。耳元でささやき合うような対話をつくり出す装置であり、また周囲の他の人々の介入をほとんど許さない対話の装置であるという点では、電話は通常の対面的な対話よりもはるかに近い「ふれあい」の場所をつくり出す装置なのだ。（吉見 113-14）

外部からの一切の音声を遮断し、コミュニケーション参加者の声のみが響き合う空間。物理的に隔絶されているにも拘わらず、あたかも密着しているかのような錯覚を与える親密な空間。電話が生起するヴァーチャルな空間は、一対一の口頭コミュニケーションの空間よりも遙かに密閉された親近性を招来する。

では、モリスが浴槽の中でヒラリーから真実の裏付けを取るコミュニケーション空間はどうであろうか。浴室や浴槽自体が、極端に閉鎖的な空間を提供することは言うまでもない。さらに、モリスはヒラリーと裸体を接触させて愛撫しながら新事実の裏付けを取る。彼らの身体は物理的に密着している。つまり、新事実の暴露と裏付けが行われる距離帯は、それが物理的接触であろうとヴァーチャルな接触であろうと、いずれも極めて密接している。論文酷評事件の真相が提示されるコミュニケーション空間は、文通よりも、そして通常の一対一の口頭コミュニケーションよりもさらに近い距離帯に置かれる。通話と同様に、浴槽でのコミュニケーションは、文通にはない親近性をその特性とする。高度に親密な排他的空間は、空間外への事実の漏洩を厳しく阻止し、モリスによる真相の秘匿を容易にする。仮に真相が隔絶した距離帯で伝達されていたならば、秘匿性は著しく減退していたことであろう。モリスは電話がもたらす距離帯と裸で抱き合うという距離帯を有効活用することによって、新事実を秘匿し真相の漏洩を回避することができる。

モリスの復権

モリスはストラウド副学長に対して、事件の顛末を打ち明けない。彼はデジレに対して手紙の誤報を訂正しない。また濡れ衣を着せていたフィリップそしてヒラリーに対しても、彼は事件の経過を明かすことをしない。浴室でヒラリーに裏付けを取る機会は、ヒラリーに事の顛末を話す絶好の契機であったにも拘わらず、モリスは結局真相を打ち明けない。モリスはこの機会を最後に、論文酷評事件のコミュニケーションを打ち切る。彼がコミュニケーションを打ち切った結果、フィリップとヒラリーにとっては、フィリップに嫌疑が掛けられていたという事実すら存在しない。デジレにとって真実はモリスの手紙に書かれている内容であって、ストラウド副学長が伝えたことではない。デジレは、モリスを酷評した犯人はフィリップであるという誤報を信じ続けることであろう。デジレがモリスとの文通で論文批判の話題を一方的に打ち切ったように、モリスは口頭のコミュニケーションにおいてそれを実行するのである。一対一の密着した距離帯で展開するコミュニケーションの閉鎖性、電話がもたらす脱視覚性、そして声の身体性と一過性。新事実の提示に利用されるこれらの特性は、モリスによる情報統制を促進強化する。モリスは情報を独占し、真実を自身の体内に封印し、コミュニケーションを打ち切る。モリスは、論文酷評事件をめぐるパワーゲームに勝利する。気の毒なのはフィリップである。彼は一連の事件において犯人であり続けるばかりではなく、一貫して情報統制を被る立場に置かれ続けるのだから。

相互参照構造

第三章“Corresponding”において、モリスは論文集と *TLS* という文字メディアに対する苦々しい体験談を、手紙という今一つの文字メディアを介して妻に打ち明ける。モリスに災難をもたらした原因は文字であるにも拘わらず、彼はなおも文字に依存しながらその災いについて語るのである。ここには、メタ的な構造、即ちメディア・コミュニケーションを基軸とした入れ子構造を確認することができる。物語内容の点から見ると『交換教授』はメタフィクションであり、ロジはそのこ

とを認めているが（AF, 229）、メタフィクションは、メディア・コミュニケーションに関わる事象にまで波及している。モリスを取り巻くこの皮肉の構図が、文字のメディア性（mediality）を前景化し演出する。さらに第五章“Changing”における声と電話の参与は、文字をも相対化させる。読者の体験領域において、このような構造はメディアの相互参照を活性化させ、メディアの疑似体験を促進する有力なモメンタムとなる。読者が論文酷評事件を契機としてメディアへの意識を大いに覚醒されるのも、まさにメタ的な相互参照構造による。

この相互参照は、登場人物間のコミュニケーションだけで完結されない。『交換教授』はメタフィクションとして、物語世界外の住人であるロッジや読者に対しても開かれている。登場人物によるメディア体験は、今一つの文字メディアである『交換教授』という書物をめぐるロッジと読者とのコミュニケーションにまで波及するのである。小説家ロッジが活字を媒体として『交換教授』を書き、それを読者から批判され、陰口をたたかれ、あるいは無視されるというコミュニケーション過程は、モリスが論文集にオースチン論を書きそれがTLSで批判される構図、週刊誌で批判記事を書いた研究者が手紙で痛罵される構図、そしてモリスが手紙を書きデジレから無関心という反応で応じられる構図、さらには、批判した真犯人が判明したことに付随して、声の世界で話題が再燃し消火される構図そのものである。また、ロッジの小説を読んだ読者がそれを公共の場で批判し、私的空間で陰口をたたき、無関心であり続け、あるいは小説の話題を独断的に揉み消すこともまた、批判者、モリス、そしてデジレの追体験に他ならないのである。ロッジ自身と『交換教授』の読者は、文字と声をめぐるメディア体験を登場人物と共有する。メタフィクションの相互参照構造は、『交換教授』の書き手と読み手をもメディア体験に、そしてメディア使用に帰因するパワーゲームに巻き込む。論文酷評事件に関与する登場人物のメディア体験は、『交換教授』をめぐるロッジと読者のメディア体験の縮図であり続ける。

パワーゲーム第一ラウンド：文字

第三章“Corresponding”におけるメディア間パワーゲームでは、そのプレーヤー

は専ら文字に限定される。論文集、週刊誌、そして小説は活字メディアであるという点で互いに類似性を示し、手書き文字を使用する手紙に対する異質性を主張する。換言すれば、手書き文字メディアである手紙を参照することによって、活字メディアを使用する論文集、週刊誌、そして小説はそれらの同質性を、そして手書き文字を採用する手紙との異質性を再確認するのである。¹⁶⁾ 前述したように、手書き文字と活字とも非対面式の遠隔コミュニケーションで採用されるために、非対面性が喚起するコミュニケーション参加者の匿名性は前景化されない。活字と手書き文字の決定的な相違は、手書き文字が一对一、乃至は一对少数のミニ・コミュニケーションにおける気付きの必然を保証するのに対して、活字が一对多数のマス・コミュニケーションにおける不覚と気付きの偶然を生起させることにある。

マス・コミュニケーションに参加するモリス、批判者、そしてロッジの中で、モリスとロッジは活字メディアがもたらす気付きの偶然という体験を共有する。複数の活字メディアに手紙という唯一の異種メディアを介入させ、それとの差異においてロッジはモリスとの共感関係を確立するのである。気付きに対する衝撃の脅威、そして気付きの時機喪失と遅延に対する恐怖がロッジを苛む。小説家としてのロッジが共感するのは、デジレと文通する私的なモリスではない。彼の共感の対象は、研究者という公的存在としてのモリスである。研究者としてのモリスは論文を発表し五年という時間差をもって論文を批判されていることを発見するという憤懣と無念を体験するが、小説家ロッジも『交換教授』や彼の全ての小説をめぐって公的なモリスと同様の体験をする不安に脅える。つまり、ロッジは、自らの小説を匿名の大衆のまっただ中に放り込むこと、そして彼の知らないところで酷評されること、あるいは取り返しのつかない「時間の経過」を伴って酷評に偶然気付くことに対する不安をモリスと共有する。文通する私的なモリス、そして常に私的なメディア空間に安住するデジレを介入させることによって、小説家ロッジは公的なモリスとの

16) 本稿では、論文集、週刊誌、そして小説を活字メディアとして一括りにした。ライアンはメディアとジャンルの境界の曖昧さに対して注意喚起する (Ryan 18-19)。確かに、論文集、週刊誌、小説という概念はジャンルに属するが、それぞれメディア特性を異にすることも事実である。しかし、本論はその差異にまで踏み込む余裕はなかった。

共感関係を演出し、研究者モリスを追体験する。

さらに、ロッジは、酷評の冤罪を着せられたフィリップとも体験を共有する。批判者は *TLS* という公的なメディア空間に参加する。デジレとの文通によるモリスの報復に気付かないというフィリップの絶対的無知は、小説家ロッジの上にも降りかかりかねない。マス・コミュニケーションという公的な空間に留まり、文通という閉鎖的で私的なコミュニケーションと対峙することによって、フィリップと同様にロッジは情報の量的不利な立場に身を置き、自らの小説を批判の危険に晒さねばならない。フィリップは絶対的無知によってナイーブや愚かさを帯びることになるが、ロッジもフィリップと同様の属性を宿命づけられている。ロッジとモリスの共通体験は、気付くことに関するものである（具体的に言えば、気付くことに帰因する激怒や応酬できないことに対する無念など）。それに対して、ロッジがフィリップと共有する体験は、気付かないことに関わる（無知そのもの。無知に対する不安や恐怖など）。気付きたい、しかし気付くことに対する衝撃に怯えるという正反対の力学を、ロッジはそれぞれフィリップとモリスを通して追体験するのである。

そしてデジレを通して、ロッジは情報制御における相対的不利をモリスやフィリップと共有する。常に一対一という閉鎖的で安全なコミュニケーション空間に住み、開かれた空間に参加することのないデジレ。モリスの苦情に無反応を決め込み、論文批判の話題を一方向的に打ち切ることによって、コミュニケーションのキャッチボールを制御するデジレ。モリスに痛罵されていたことをフィリップに伝えないことによって、情報の量的優位を確保するデジレ。この独裁者のごときデジレによる情報統制の許では、モリスもフィリップも従僕でしかない。開かれたコミュニケーション空間に参加するロッジは、閉じられた空間をシェルターとする私的なデジレと体験を共有することはない。小説家ロッジはデジレを恐れているのである。デジレの果たす機能は、モリス、フィリップ、そしてロッジに共同戦線を張らせ、戦友のごとき「敵の敵は味方」式の構図を確立させることにある。ロッジはデジレという異分子を通して、モリスやフィリップとの共感関係を強化するのである。ロッジは、モリスとフィリップの不幸を追体験する危険性への自覚と自意識に苦悩する。

では『交換教授』を読む読者はどうか。読者は批判者とモリスばかりではなく、デジレをも追体験できる地位に置かれる。なぜなら、読者はロッジの小説を公共の場で批判するという位置づけを批判者と共有し、文通という私的な場でロッジを痛罵するという立場をモリスと共有する。さらに、ロッジの小説についての議論を打ち切ったり、そもそも彼の小説を話題にすらしめないという無関心の姿勢においては、読者はデジレを追体験することができるからである。ロッジは、『交換教授』の読者にこのような優越的地位を授ける。しかし、ひとたび読者が公共の空間で『交換教授』について何らかのメッセージを書いた瞬間から、読者も一気にフィリップ、モリス、そしてロッジの陣営に編入されることも忘れてはならないだろう。パブリックなメディア空間で読みそして書くことには、快楽と危険が伴う。そして、私的なメディア空間はその住人に優越的地位と権力を付与する。このことを読者は再認識するのである。

パワーゲーム第二ラウンド：声の勝利、文字の敗北

第五章“Changing”において、声が電話という技術的支持を受けて参戦する。モリスが文字を見限り声を武器にした瞬間から、パワーゲームの形勢は激変する。第三章における手書き文字と活字による文字メディアの内戦は、新たに参戦した声の圧倒的な威力によって一蹴される。電話は一對一のコミュニケーション・レベルと非対面性において手紙と類縁関係にあり、書物とはコミュニケーション・レベルにおいて異質性を示す。声と電話が手紙と決定的に袂を分かつのは、その一過性、親近性そして身体性においてである。声と電話は、文通よりもさらに私的で親密な空間を招来する。モリスは声と電話で武装することによって、文通という私的空間に安住するデジレから権力を奪取する。文字の脱身体性を甘受するデジレは、声の身体性を武器とするモリスに敗北する。デジレは、便箋上に痕跡を残す文字情報に依存し続ける。モリスは、声という記録性のないメディアを利用することによって、真実を彼の身体内に独占する。デジレはモリスの情報操作によって事件の真相に到達できないばかりではなく、真犯人がフィリップであるという誤報を信

じ続ける。フィリップは冤罪を着せられているにも拘わらず、その情報すら拒絶され放置される。論文酷評事件において、権力構造を決定し強化する要因は、登場人物によって使用されるメディアが招来する親近性にある。文通がもたらす親密なメディア空間は、電話と浴室での裸の対話というさらに親密な空間によって、いとも簡単に凌駕される。第三章においてフィリップとデジレに翻弄され続けたモリスは、第五章において声を武器にして彼らへの報復に成功するのである。

公的で開かれたメディア空間の住人であるロッジは、第五章において活字を放棄し新たに声を武器にした私的なモリスと訣別する。声という大敵の出現を契機にして、小説家ロッジは文字メディアに依存するデジレを新たな戦友に加える、たとえ彼女が私的な文通の利用者であろうとも。デジレ、フィリップ、そしてロッジは文字の陣営として、声を独占するモリスとの闘争に敗北する。ロッジは、パワーゲームにおいて一貫して敗北し続ける登場人物に小説家の姿をみる。公的なロッジが最も恐れる対象は私的なコミュニケーション空間と、それを形成するメディアである。ロッジが小説家として活字メディアを採用した瞬間から、彼の被虐的メンタリティは宿命付けられている。書物は手紙に勝てない。手紙でさえ勝てない相手である声に、書物が勝てるわけがないのである。一方読者はどうか。読者は権力を奪取されたデジレを見限り、新しい支配者であるモリスと共鳴関係を構築する。読者は、公的空間と私的空間を自由に使い分けることができる。読者は、*TLS*のような公的なメディアでロッジの小説を批判することもできれば、手紙や電話、そして浴室のような私的空間でロッジを酷評することもできる。つまり、一貫してパワーゲームに勝ち続けるのは読者だけである。ゲームのそれぞれの局面で、読者は批判者、デジレ、そしてモリスという三頭の勝ち馬を乗り換える。ロッジは、三頭の負け馬を乗り分けるのである。読書が根本的に私的な行為であること、小説を書くことが公的な行為であること、コミュニケーションにおけるこの宿命的な不均衡と不公平への現実認識が、小説家ロッジに勝利を拒絶する。

結び

批評家の間では、Stanley Eugene Fishがモリスのモデルであり、イギリス人であるフィリップがロッジの分身であるという分業体制を認める傾向が一般的である。内容的には確かにそうかもしれない。カリフォルニア大学バークレイ校がユーフォリア州立大学のモデルであり、バーミングハム大学がラミッジ大学のモデルであることがしばしば指摘されていることから、そのように推測することができよう。¹⁷⁾しかし、事がそれほど単純ではないことに、メディア・コミュニケーション論は注意喚起する。ロッジはフィリップだけでなくモリスでもあり、デジレでもある。いずれにせよ、被虐的なメンタリティに苛まれるロッジがいることは確かであろう。書物と週刊誌という活字メディアで書くことについて手紙で書き声で話すことについて小説を書く。論文酷評事件をめぐるメディア・コミュニケーションの三重の入れ子構造が、メディア間の相互参照を活性化し、メディアの疑似体験を物語世界の外にまで波及させるのである。

メディアとしての書物は、その特性として手紙や声にはない可能性を秘めていよう。しかし、活字メディアに依存する登場人物が手書き文字や声を武器とする人物によって凌駕され続けるパワーゲームを通して、『交換教授』は書物が背負う物質的限界と不利を演出したのである。就中、活字が声に圧倒される構図は、最終章“Ending”におけるフィリップのメタフィクショナルなメディア比較論と奇妙に響き合っていないだろうか。フィリップは言う。

Well, the novel is dying, and us with it.... It's an unnatural medium for their experience. Those kids (*gestures at screen*) are living a film, not a novel. (250)

I mean, mentally you brace yourself for the ending of a novel. As you're reading, you're aware of the fact that there's only a page or

17) Morace 157 など。

two left in the book, and you get ready to close it. But with a film there's no way of telling, especially nowadays, when films are much more loosely structured, much more ambivalent, than they used to be. There's no way of telling which frame is going to be the last. The film is going along, just as life goes along, people are behaving, doing things, drinking, talking, and we're watching them, and at any point the director chooses, without warning, without anything being resolved, or explained, or wound up, it can just ... end. (251)

声は終わらない。声は永遠に続く。動詞の進行形や“-ing”語尾の単語を連射することにより、声の進行性が圧倒する。勝利する映画＝声、敗北する小説＝活字。明らかにロッジは小説の、そして書物の死を予感していた。小説家の敗北感情は、Karl Kroopの講義タイトル“The Death of the Book?”(68)にも垣間見られないであろうか。クループは、講義タイトルから疑問符を削除することを検討中だという。(76)

参考文献

- Bergonzi, Bernard. (1995) *David Lodge*. Plymouth: Northcote House Publishers.
- Berlo, David K. (1960) *The Process of Communication: An Introduction to Theory and Practice*. San Francisco: Holt, Rinehart and Winston.
- Chafe, Wallace. (1994) *Discourse, Consciousness, and Time: The Flow and Displacement of Conscious Experience in Speaking and Writing*. Chicago and London: University of Chicago Press.
- Eisenstein, Elizabeth L. (1983) *The Printing Revolution in Early Modern Europe*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Hall, Edward T. (1966) *The Hidden Dimension*. New York: Doubleday.
- Jackson, Tony E. (2009) *The Technology of the Novel: Writing and Narrative in British Fiction*. Baltimore: Johns Hopkins University Press.
- Lodge, David. (1992) *The Art of Fiction*. London: Penguin Books.
- Lodge, David. (1975) *Changing Places: A Tale of Two Campuses*. London: Penguin

- Books, 1978.
- Morace, Robert A. (1989) *The Dialogic Novels of Malcolm Bradbury and David Lodge*. Carbondale and Edwardsville: Southern Illinois University Press.
- Ong, Walter J. (1982) *Orality and Literacy: The Technologizing of the Word*. London and New York: Routledge.
- Ryan, Marie-Laure ed. (2004) *Narrative across Media: The Language of Storytelling*. Lincoln: University of Nebraska Press.
- Tannen, Deborah. ed. (1982) *Spoken and Written Language: Exploring Orality and Literacy*. New Jersey: Ablex Publishing Corporation.
- シャルチエ、ロジェ (1992) 『読書の文化史: テキスト・書物・読解』 福井憲彦訳 東京: 新曜社.
- 古田暁監修 (1987) 『異文化コミュニケーション』 東京: 有斐閣.
- マルタン、アンリ = ジャン・フェーヴル、リュシアン (1971) 『書物の出現』 東京: 筑摩書房 1998.
- 清水徹 (2001) 『書物について』 東京: 岩波書店.
- 吉見俊哉、若林幹夫、水越伸共著 (1992) 『メディアとしての電話』 東京: 弘文堂.